



## 障がい者スポーツの普及・啓発に向けて

障がい者スポーツにかかわる情報発信や体験会を通じて障がい者スポーツの普及・啓発の支援を進めています。

撮影：越智貴雄／カンパラプレス

### 障がい者スポーツをより幅広く支援するために

トッパンは、ダイバーシティ経営の一環として、ポジティブアクションによる女性の積極的な活用や障がい者雇用に力を入れています。さらに「スポーツ専従社員制度」を導入するなど、社員の多様性を重視した成長戦略を展開しています。

この考え方を社外にも展開すべく、トッパンは、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会が掲げる「活力ある共生社会の創造」という理念に賛同し、2015年1月から同協会のオフィシャルパートナー企業の一員となったことを契機に障がい者スポーツの支援活動を開始しました。

### Webサイト「SPORTTRAIT」

公益財団法人日本財団が日・独・米・韓・仏・豪6カ国において行った「国内外一般社会でのパラリンピックに関する認知と関心」調査の結果報告(2014年11月)によると、パラリンピックの認知度については、日本は成人国民

の98.2%がパラリンピックを認識しており調査対象6カ国中最も高い比率を示しています。米国は71.1%で最も低い比率となっています。ところが、パラリンピック以外で、直接障がい者スポーツを観戦したことがあるか、との設問に対しては、最も比率の高いドイツが18.9%、米国はそれに次ぐ17.9%でしたが、日本では4.7%という比率となっており、多くはテレビやインターネットを通じて、パラリンピックを目にすることはあっても、観戦経験のある人は極めて少ないことがわかりました。

ここから、日本における障がい者スポーツが活性化していないのは、競技大会への観客動員ができていないこともその一因になっているのではないかと仮説を立て、観客動員につなげるための情報発信を行うことを検討し、障がい者スポーツに関する情報発信Webサイト「SPORTTRAIT」を2015年9月に立ち上げました。

「SPORTTRAIT」は、障がい者スポーツをはじめ観戦する人たちに向けて、障がい者スポーツを理解し、楽しむために欠かせない3つのコンテンツを発信しています。

選手のアスリートとしての凄さ、ひたむきさ、真摯さを印象的なポートレート・写真と核心に迫ったインタビュー記事で表現するATHLETES' CORE。はじめて観戦する



SPORTRAIT  
LIMITLESS ABILITY

ATHLETES' CORE POINT OF THE GAMES THE SUPPORTERS CONTACT

世界一になる

車いすレース 渡辺勝

SPORTRAIT  
LIMITLESS ABILITY

QRコード  
<http://sportrait-web.com>



人の視点を意識し、競技の見どころやルールなどを図やイラストを交え、わかりやすく解説するPOINT OF THE GAMES。そして、障がい者スポーツを支える人や技術、団体などにフォーカスし、彼らの想いや彼らから見た障がい者スポーツを紐解いていくことで別視点での見どころを伝えるTHE SUPPORTERS。

公式SNSとの連動やさらなるコンテンツの拡充を図ることで、障がい者スポーツの普及・啓発に向けた情報発信を継続していきます。

## 魅力を伝える体験型イベント

トッパンでは、一緒に働く職場の仲間同士やそれぞれの家族との絆や団結力を高める目的で、2012年度から労使共催の大運動会「TOPPAN SPORTS FESTIVAL」を開催しています。

2015年9月に千葉県の幕張メッセで開催されたこのイベントには全国から社員並びにその家族など4,000名を上回る参加者があり、趣向を凝らした様々な競技に汗を流しました。

今回、このイベント会場の一角に「チャレンジド・スポーツコーナー」を設け、障がい者スポーツの紹介と体験イベントを行いました。

紹介コーナーには、障がい者スポーツ12種目を紹介するパネルを掲示したほか、車いすテニスの上地結衣選手が使用していた競技用車いすやテニスウェア、ラケットと2015年のウインブルドン女子ダブルスのチャンピオン・プレートのほか、ブラインドサッカーのボールとアイマスクなどを展示しました。

また、体験イベントでは、車いすテニス、ブラインドサッカー、ウィルチェアラグビー、車いすレースの4種目で参加者を募りました。

車いすレースでは、渡辺勝選手（凸版印刷（株）所属）が1分間で走った距離にどこまで近づけるかを競うシミュレーションが行われ、渡辺選手のアスリートとしての能力を実感する機会となりました。

トッパンは今後もこのような体験イベントを開催し、障がい者スポーツへの理解・感心を高めるとともに、選手とのコミュニケーションを通じて障がい者スポーツのファンづくりに貢献していきたいと考えています。

## 障がい者スポーツ支援について意見交換会を開催

2016年3月に、障がい者スポーツをさらに盛り上げていくために企業に求められる役割・課題やトッパンに求められる取り組みのあり方についての意見交換会を開催しました。ご出席の皆さまからは次のようなご意見をいただきましたので、これを今後の障がい者スポーツの支援活動に活かしていきたいと思います。

### 支援の目的・理念

**藤田氏:**日本においては、不景気になると企業スポーツのチームが廃部に追い込まれる。日本障がい者スポーツ協会(以下JPSA)には、2020年を超えても持続的に障がい者スポーツを支援して発展していくというビジョンがあり、各企業もそれに賛同してやっていく必要があるが、どのような理念に基づいて支援をしているのか。

**小川氏:**長年障がい者支援、福祉に取り組んできたことに加え、会社の60周年という節目も重なり、障がい者スポーツ支援の強化はごく自然な流れだった。

**坪松氏:**CSR活動の新たな取り組みを考えた時、自社の理念、あるいは「やってみなはれ」という企業としての価値感に合致したテーマだと強く感じた。

**山本氏:**我々の掲げる理念に共感していただき、「障がい

者と健常者が当たり前混ざり合う社会の実現」に向けてともに手を組んでいくことが一番大切である。

**井田氏:**JPSAも自分たちが目指すものを明確にするために「活力ある共生社会の創造」というビジョンを1年がかりでつくり上げた。企業の理念や社是と我々のビジョンがシンクロし、JPSAファミリーとして一緒に社会を変えていくという価値観を共有できる企業と連携していきたい。

**坪松氏:**2020年を超えて持続的に支援を継続していけるかどうかはJPSAオフィシャルパートナー企業に共通の課題である。

**山本氏:**競技団体としても、企業側が障がい者スポーツを支援しているというメッセージを出すことが目的化していたり、障がい者スポーツが注目されるので露出を増やしたいという目的での支援では、2020年以後の支援は期待できないと思う。だからこそ、持続性の観点からもビジョンを共有した上で企業と社会それぞれに提供できる価値が何かを明確にしていくことが重要である。

### 支援の方法・内容

**藤田氏:**企業の支援のあり方としてアスリートの雇用があるがどのような雇用をしているか。



日本福祉大学スポーツ科学部  
開設準備委員会委員長  
(当時:同志社大学スポーツ健康科学部教授)  
藤田紀昭氏 ファシリテーター



公益財団法人日本障がい者スポーツ協会  
企画情報部長  
井田朋宏氏



特定非営利活動法人日本ブラインドサッカー協会  
事業管理部広報チームマネージャー  
山本康太氏



三菱商事株式会社  
環境・CSR推進部  
社会貢献チーム チームリーダー(当時)  
小川直子氏



サントリーホールディングス株式会社  
コーポレート・コミュニケーション本部  
CSR推進部 部長  
坪松博之氏



凸版印刷株式会社  
専務取締役  
大久保伸一氏



意見交換会開催日時・場所 2016年3月18日(金) 15:00～17:00 凸版印刷(株) 本社ビル会議室

**小川氏:** 自社に盲人マラソンの選手がいるが、彼の競技活動を応援することで、社内における障がい者スポーツに対する認知・理解も進む。アンバサダーとして果たす役割は大きいと考える。

**井田氏:** JPSAでは、アスリートが現在所属している企業において、アスリートとしては待遇されていなくても一社員として厚遇されていると、恩義を感じて他の企業がアスリート雇用を掲げて募集しても簡単にはスイッチしないと認識している。怪我をして現役を続行できなくなるとすぐに契約を切られるのではないかという不安を抱いていたり、現役引退後のセカンドキャリアでもきちんと雇用されたいと思っているアスリートも多い。それに正面から向き合う企業に入社したいと考えている。

**藤田氏:** なかなかアスリート採用が広まらないということだが、優れたコーチや指導者がいれば状況が変わるか。

**井田氏:** JPSAの公認指導者制度には約22,000名の登録がある。大学、短大、専門学校で資格取得可能だが、就職するとその資格を活かすことを選択しないため定着する指導者が少なく、アスリートに寄り添って一緒に支援する指導者は少ないというのが実情である。

**山本氏:** 競技大会における企業のボランティア活動はうまく機能しているのか。

**坪松氏:** ボランティア活動を通じてアスリートとふれあえればそのアスリートのファンになっていく。

**井田氏:** 主催者側からすると、駐車場係りや受付係り、お弁当係りも必要で、すべてのボランティアがアスリートとふれあえるわけではない。

**坪松氏:** 前夜祭でボランティアとアスリートとの交流会を行うなど、ボランティアと連携していく仕掛けづくりを主催者側に期待したい。

### 取り組みによる影響・変化

**藤田氏:** 障がい者スポーツ支援を始めてから、社員にどの

ような変化が見られたか。

**坪松氏:** 社員を対象とした車いすバスケのゲーム観戦と体験会を行ったところ、社員の意識が変わった。競技としての迫力、面白さ、さらに選手たちの凄さを直接に感じてもらうこと、そのような機会を早いうちにできるだけたくさんつくることが大変重要だと感じた。また、それが継続性につながっていくと考える。

**小川氏:** ボランティア活動を通じて、障がい者スポーツを会社を挙げて応援するという機運が高まり社内の一体感が醸成されつつある。

### トップランの取り組みへのご意見

**藤田氏:** 最後にトップランへのアドバイスをお願いしたい。

**井田氏:** アスリートとは、何でも言い合える仲間として接していただきたい。同じ立場の社員としてアスリートを複数雇用することを検討してはどうか。

**山本氏:** 競技団体に社員を出向していただき、そこで学んだものを社内変革や人材育成に活かしていただくというやり方もあるのではないかと。

**小川氏:** 1社でできることは限られている。各企業で貢献できることを持ち寄り、大きな活動にしていくための場を増やしていけるよう、一緒に進めていってはどうか。

**坪松氏:** 重要なのは持続性である。一度始めたら途中ではやめない。CSR活動として役割が求められる限り続けるという意味を持つことが重要である。

**大久保:** 私どもトップランも、障がい者スポーツのアスリートとして入社した社員が本当の意味で居心地よいと思える受け入れ方を心がけること、持続性が大変重要だということを肝に銘じなければいけないと考える。有り難うございました。